

精神発達遅滞幼児の治療保育過程の研究

1 行動の意味—階段の事例を通して

研究第8部 津 守 真

1. 前提——おとなの空間から、子どもと共有する空間へ

子どものひとつの行動の見え方は、見るおとなの属している空間の性質によってかわる。その空間は、物理的空間と力動的に関連しながら、同時に、その人が関心をもって動いている内的空間のことである。たとえば、おとなの社会の事務的なことがその人の世界を占めている瞬間には、子どもの行動を見ても、その行動の子どもの世界にとって持つ意味を見出すことは困難であろう。そのときには、子どもの世界の中のさまざまな動きの結果としての行動が、すでにおとなになった者の習慣として受けいれている生活様式と食い違わないかどうか、また、おとなの生活の内滑な遂行に支障を来さないかどうかということが、おとなにとって見える部分となる。おとなの世界からいうならば、このことは当然のことであって、その故に、子どもの心を占めている世界が主になってつくられる場——それは子どもが成長する場であるが——が、必要になる。それが幼児の集団保育の場であり、また、治療保育やセラピーの場である。

おとなの世界から子どもを見る時には、子どもは、将来、おとなの社会にひきいれるべき存在である。その点から子どもの行動を見るならば、それは、おとなの生活への準備の一段階として承認できるかどうかの問題になる。これも、おとなの側から当然な、見方である。子どもがおとなになってゆくのに必要なことは、子どものときから準備してやりたいというのは、おとなが共通にもつ心情といってよいと思う。しかし、そのときに、子どもの空間から切り離されて、おとなだけの空間の中で考えると、直線的思考に支配されやすい。そして、おとなの生活様式に近づく子どもの行動は、常に上昇する階段のように考えられやすい。退行する行動や、おとなの常識に反する行動に、意味を見出すことができない時は、子どもの空間との重複性が薄れて、単一のおとなの空間にとどまっている時といえるだろうと思う。子どもの保育や治療の実際に従事するおとなは、おとなの空間と子どもの空間の中間に立ち、両者を同時に重

複させている存在である。両者の間を揺れ動き、一方に偏する瞬間も少なくない。たとえば物理的に同じ空間にあっても、ほとんどおとなの空間のみが占める瞬間もある。また、おとなとしての仕事をしていて、子どもの実際の場に出てゆくには、努力を要する場合もある。このような場合、子どもの空間とおとなの空間とは、ほとんど異質なもののように思われる。

たとえば、子どもとの保育的接触に入るとき、おとなの用務の関心が頭に残っていて、折を見て子どもから離れようとしているときには、子どもの空間の中にはいりきれない。子どもから見るならば、自分の方に心を向けていないおとなを見るであろう。おとなが心をきめて子どもとつき合うときには、子どもはおとなを迎え入れてくれる時が多い。

事例——事務的なことで異質な時間を過した後、心をきめて子どもの中にはいる。

丁度、Tが登園して、母親から離れたがらず、母親にまつわりついているところに出会う。私は、この子とつき合おうと思い、床に腰をおろす。台を間にして、私はTと手を触れたり、顔を見合わせたりするうちに、Tは口元をほころばせて少し笑うようになった。私に向って寄せてくる親しさの情を感じることができた。(この子どもと一緒にいつづけようと思っているときには、情をかわず関係にはいれるように思う。ゆきずりに、立ち去る途中で立止ったときには、物理的には近くにいても、おとなの空間と子どもの空間は切り離されている。一緒に笑い合ったり、一緒にいることによって、子どもが安心して遊ぶときには、おとなと子どもは空間を共有しているといつてよいであろう。) 台の左から右から上から、目を少し出して私をのぞき、笑う。この間に母親が去るが平気である。このことから始まって、Tは、通りがかりの子どもがおいていった積木を台の上に並べたり、ダンボールの箱を頭にかぶったり、いろいろの物で遊びながら活動の範囲を、台の周囲から少しずつひろげてゆく。途中で、行きずりのおとなが声をかけて通りすぎると、一瞬活動が止まって口元が緊張する。また、私が物

をとりて立上ると、手をとめて、私のゆくえを目で追っており、もどつてくるとまた動きはじめる。

このような事例はほとんど無数であり、多くの人が体験していることである。こうした事例からわかるように、子どもと空間を共有するときに、子どもの世界の独自の動きを体感することができる。それは子どもと空間を共有しなければ見えてこないものであり、その観点からいうならば、おとなの空間からは異質なできごとである。逆にみるならば、子どもと空間を共有しているときのおとなの行動は、別の空間に属するおとなの観点からは奇異に映りうるものである。物をとりて立上ることもできないで床に坐っているおとなの行動は、別の空間からは読解不能なものとなりうる。しかし、こうして子どもと空間を共有するときに、直線的にはなく、力動的に動く子どもの空間があることを知り得る。子どもが、あることができるようになる過程は、機械的に段階づけられた構造をなすメカニズムではなく、子どもが自ら発動し、子ども自身、安心感と生き甲斐を求めながら、生きようとする人間の生の過程そのものである。それは外的視点から見れば、上昇し、停滞し、下降し、退行し、適応し、反抗し、逸脱し、さまざまな方向に動きつつ、成長の方向に向う過程である。これを内的視点から見れば、子ども自身、迷い、悩みつつ、自ら生きる道を見出してゆく過程である。この観点からいうならば、治療も保育も、子どもと内的世界を共有するところに成立すると考えられよう。これは、おとなが子どもの行動に意味を見出す上での前提である。

2. 方法——子どもと共有する空間からおとなの空間へ

言語をもたず、単純な行動しかししない知恵おくれの幼児の場合でも、無意味なように見える行動の断片を、子どもの内的世界の表現として見ると、意味を見出せる場合が多い。どんなに発達の初期の原始的な段階であっても、子どもは自らの中に発動する力を持ち、生きる衝動の流れはたえず動き、その変化につれて自らの内に中心を求め、生きる意味を見出そうとしている。発達の原始的な段階にあっては特に、それは意識の水準で行われるのではなく、ほとんど無意識の水準で行われている人間の精神のはたらきである。従ってそれは、言語によって表出されるのではなく、身体運動を主とする行動によって表出される。

保育者や治療者が、子どもの空間を共有することができたとき、子どもと共に動き、あるいは子どもに応じて動く身体運動を媒介として、動きのイメージにより、²⁾子どもの空間の中に動くものをとらえる。それは、子ど

もにふれてとらえるおとな自身の体験であり、すでにおとなのものに転換されている。おとなは、その体験の本質をなすものを探ろうと努力し、言語によって明確化しようとする。それはおとなの側で意味を明確化しようとする作業である。

このようにして、おとなの側で明確化される意味は、未知のものをふくむ総体の一側面である。多くの可能な意味の中の一つにすぎない。他の時点で、あるいは、他の人が、同じ行動の意味をとらえる場合、それは全く同じものとなるとは限らず、まして同じ表現となるとは限らない。

意味を見出す作業は、機械的作業ではなく、唯一絶対の客観的解答が得られるものでもない。自己形成しつつある人間が他人と自分を理解しようとする人間的行為である。

行動の意味を見出すことは、保育や治療において欠くことのできないものであり、また、その過程においてなされるものである。

3. 事例——Mの階段

知恵おくれの幼児と出会うところの、無数の事例の中のひとつとして、Mと階段の事例を次に報告する。

Mは言語がなく、砂を口にいたり、物を投げたり、気に入らないと頭を床に打ちつけたり、自分の体をつねったりして大声をあげる。ある時から、階段の昇降を好むようになった。階段を昇ったり降りたりしていると、長時間きげんよく過す。その階段の昇降に対する関心は8か月以上続くが、その間に少しずつ関心の変化が見られた。次に特徴のある行動様式を示すものを掲げる。

1月18日

Mは小さなモデルカーを、床に力をいれて投げつける。とくにある特定のモデルカーを、何回もくり返して投げる。私は傍にいて、固体の抵抗のイメージが動いていると思い、箱つききをわざと大きな音をたてておいたり、数回はまったブロックを床に投げられるようにしてみた。Mはブロックを床にたたきつけたり、モデルカーをたたきつけたりする。叩きつける力、床にぶつける抵抗感、その音などが、ここで重要なものと思われた。Mの心の中には何か抵抗にぶつかって乗りこえることができないでいるものがあるように思われた。そのあとMは私の手を引いて階段にゆき、階段を昇りはじめたので、私は心をきめて階段のMとつき合う。

Mは階段をゆきつくところまで昇り、屋上の手前までゆく。そこで数段、階段の昇降をくり返す。私を階段に坐らせ、私が立ち上るとすぐに来て腰をおろさせる。自分が階段を探索するときに、おとなに空間を共有してい

てもらいたいようである。

屋階なので、上を見ると、白い壁が四角く囲んでいる。だれも通らない孤独感がある。Mはウーウーいながら数段の階段を往復する。

しばらくの後、私の手を引いて、階段の下の方に坐らせる。そこは屋上に向う昇り階段と、階下が見下せる降り階段の中間のおどり場である。Mはおどり場を中心に、上に昇ったり、下に降ったり、往ったり来たりする。上方には孤独な囲みの白壁を見ることができ、下方には人が往来する廊下を見ることができる。時々、私の膝に坐って、上を見たり、下を見たりしている。

こうして、一時間くらい階段で過した。

3月1日

Mは私の手を引いて階段を昇り、階段の中間のおどり場にくる。上を見たり、下を見たり、天井を見たり、歩きまわったり、ねそべったりする。20分くらい、そうしてから、おどり場で、自分の体を軸にしてぐるぐるまわる。まわりながら、階段の上方を見たり、下方を見たりする。それを15分くらい、くり返している。私が立ち上ると、私をおどり場にひきもどし、自分もそのおどり場でまわる。Mがおどり場でぐるぐるまわりながら、上を見たり下を見たりすることに面白さを感じているであろうことを、私も傍にいて感じとることができる。このことを、その場の直接の知覚から離れて、思い起し、心のできごととしてとらえ直してみる。そうすると、自分自身を、見上げる方向と見下ろす方向との中間にあって回転する存在としてとらえることは、人間存在の認識の仕方のひとつであることに気付かされる。おとなの職業生活において、人は自分より上の位置の人をもち、下の位置の人をもち、その中間で回っている。人の生涯において、人は進むべき未来をもち、過ぎ去った過去をもち、その中間で回っている。この世界において、人は見上げる空をもち、足の下の地下をもち、その中間で回っている。人は常に中間的存在であり、そこで人は回転していることをいたるところに見出す。それは人間存在の認識の仕方の共通の原型ではないだろうか。Mはそれを階段におけるきわめて具体的な行動で示しているといえると思う。階段のおどり場で、Mが熱心に行っていたことを見ていて、無意味な行動のように思われず、M自身が何かを探索しているように思えたのは、こういうことだったのではないだろうか。Mの生活範囲は、おとなに比べれば狭く、意識の内容は明確ではないであろう。しかし、その生活範囲の中で、知恵おくれのMは、自分の将来や過去を、不安や悩ましきをもって見、その中間にあって、どうしてよいかわからないで回転している

ことも多いであろう。

人間を中間的存在として認識する仕方は、古来からあったようである。山の上下りの境目は「峠」(とうげ)と呼ばれて、昔から特別の空間として認識されていたことは、特別の語彙の存在することからも明らかである。「とうげ」の語源は、神に手向けをした場所であるところから、タムケ(手向)の転であるという(大日本国語辞典・大言海)。その中間の空間で、人は神に祈る気持をもって、行く末と過ぎた方とを見ることは、人間の自然の情であるらしい。

知恵おくれの子どもの一見不可解な行動の中に、われわれには察することの困難な多くの障壁にぶつかって、探り求めているこの子どもたちの心情をみることができるように思う。

5月12日

Mはひきだしを次々にあけて、ビニールテープとはさみを適確にさがし、私に渡す。私はビニールテープを、2センチメートル位の長さで切ってやると、庭のすべり台の階段に1段ずつ貼ってゆく。階段の途中のおどり場で、上下をながめている。全階段を貼り終ると、私の傍にきてしばらく坐っている。陽がぼかばかと照って暖い。長い間、ひなたでぼんやりしている。快さの中に浸っている感じである。

階段に1段ずつビニールテープを貼ってゆくのは、階段の一足一足をたしかめるかのようである。

6月2日

Mは揚なたで私のひざに坐り、砂を手や体に落して心地よさそうである。かなり長時間つづいており、私もMを抱いて、よい気持だった。

急にMは立上り、私の手をひいて階段にゆく。屋階まで上り、私をおどり場に坐らせて、上を見たり下を見たりする。それから自分の靴をぬいで、ひとつをおどり場のすぐ下の段におき、もうひとつを次のおどり場のすぐ上の段におく。次に自分のくつ下をぬいで、そのおどり場のすぐ下の段におき、もうひとつの靴下を次のおどり場のすぐ上の段におく。次に私の靴をぬがせて、そのおどり場のすぐ上の段におき、もうひとつを更に次のおどり場のすぐ上の段におく。それから私の手をひいて、階段をどんどん降りて、地階までおりる。その一番下のおどり場で、私のくつ下をそのすぐ下の段におき、もうひとつを一番下の階のすぐ上の段におく。これで屋階から地階まで、要所に靴と靴下を置いてこの作業は完了したことになる。このあと、いろいろのことが間にはいるが、最後にMはいつものように階段を上り、おどり場で上下を見てぐるぐる回る。何回も回転する。

靴と靴下は足を代表するものであり、Mはそれを階段におくことにより、自分の足で一段ずつをたしかめるかのようである。おどり場と階段、そして、屋階から地階までを、すなわち、自分の立っている場所と上と下、天から地まで結ぶ橋を一段ずつ刻むようにたしかめているとも考えられよう。

6月23日

頭にできものができ、そのかさぶたをかきむしって、3日間くらい、夜も昼もねないし、食事もせず、母親はふらふらだという。

私のところにくると、Mはすぐに私の手を引いて階段にゆく。真直に屋階にゆく。屋階に、コンクリートの縁があり、そこに体を横にして上り、移動する。私が手で支えようとする私の手を払いのける。危くないように、下の方に手を差出しながら、最大限に冒険させてやる。このとき、Mはもはや頭から手を離し、実にすっきりした顔つきをしている。

次の日の母親の報告によると、この日、家に帰ってから、Mは頭に手をやることから、ふつつりと縁が切れたとのことである。私はMに冒険をさせながら、そうさせてよいのかどうか、迷いをもっていたのであるが、このことが、Mを別の生活にふっ切らせたと考えてよいと思う。この場面のMの表情は、それほど印象的であった。

この日のMは、おどり場で回転するのではなく、階段の一番上から下を見下す位置にあった。階段を上りつめて、下を見おろして、Mは自分の内側にだけ向けられた生活を克服して、外の世界に目を向けられるようになったのだと思う。

Mの階段は、まだこれで終わったわけではない。これから3か月ほど、同様にして続くが、次第にその回数が少なくなって、階段に対する関心は終る。ここに示したような、8か月間の階段をめぐる体験によって、Mのもっていた問題が解消したとはいえないし、何かの能力が増大したともいえない。Mは依然として扱うのに困難な子どもであり、能力も低い子どもである。しかし、こうした階段の活動を通して、Mは、それなりに、自分の当面している問題をいろいろに考えていたのではないかと思う。階段という具体的、現実的な物による行動であるけれども、それは同時に、Mの内的体験と思われるものを、いくらかでも明らかにしてみたいと思ったのである。

階段は、児童画の研究史の中には、いつもあらわれるテーマである²⁾。西洋でも、日本でも、ある時期の子どもは、階段やはしごを好んで描く。家の内部を描くときには、階段は、子どもが最も多く目をつけるもののひとつ

である。また、統合され、高揚した精神の状態にある子どもは、天にとどく階段を描くことがしばしば見られる。これらから知られることは、階段は、人間にとって、現実的階段であるのみでなく、精神の世界において、天上に、あるいは地下に導びく通路となっていることである。

言語をもたない知恵おくれの幼児Mの階段の行動は、普通の子どもに見られないほど、具体的行動と内的体験とが密着したものであると思う。Mは階段の途中のおどり場でぐるぐる回転し、上を見たり、下を見たりして時を過ごすことに熱中した。私はこれを、中間的存在としての人間存在の認識の仕方の原型として理解しようとした。

しばしば、道端の階段で、子どもたちが、階段の途中の段に坐りこんで、ままごとなどをするのを見かける。これは、階段の一番上でもなく、一番下でもないところに意味があるのであろう。どこの幼稚園でも、階段は子どもたちの最も好む場所のひとつであらう。階段を昇降し、また途中で遊びながら、子どもはさまざまな内的体験をしているといっていよいであらう。

知恵おくれの幼児の行動は、最初はその意味をとらえることが困難なことが多い。異質な他に出会うときには、そこに含まれている意味を前もって予想することは許されないから、最初から意味をとらえられないのは当然である。しかし、子どもとつき合ううちに、次第に行動の意味が見えてくると、子どもと共有する内的空間は次第に深められるであらう。それが治療保育の行われる場であると考えらる。

注1. 本論文は、愛育研究所、家庭指導グループにおいてなされた研究である。

注2. 津守 真、本田和子、松井とし、人間現象としての保育研究 I 光生館、昭49

注3. Makoto Tsumori: Process of Development Expressed in Children's Drawings. Unpublished